

## 巻 頭 言

雑誌『数学』前編集委員長・明治大学理工学部数学科  
矢崎 成俊

大学院前後の若い人たちへ、日本数学会編集の雑誌『数学』への想いを送ります。

大学院の修士課程から博士課程に進む決断をした後は、よしやってやるぞという決意に満ちあふれています。そのエネルギーの源は自信と期待がない交ぜになった熱い塊でしょう。そのあたりのだいたいM2からD2のころは、日本数学会や日本応用数理学会などの学会はもとより、国内外の研究集会に顔を出して、分野によっては早くも論文がアクセプトされたり（されなかったり）、さながら数学コミュニティに配属された新入社員のように初々しく研究者としての活動の場をゼミ室から大海へと広げていく時期です。新しい環境、新境地に足を踏み入れたのですから、数学も自分も含めて周りのものがすべて輝いてみえます。その中で、雑誌『数学』に何らかの形で自分の名前が掲載される僥倖に恵まれてもしたら、もう一端の研究者になった気になります。もちろん環境に慣れてくると、暗闇から明るみに出た目がやがて明順応するように、普通の風景になってきます。学位を取得する時期になると、昼間の明るさだけでなく、夜も来るのだと実感することがあるかもしれません。そして夜の帳が下りる中で、雑誌『数学』が発光していたことに気が付きます。すべてが輝いていた時期には、光の中で発光していても特段浮かび上がらなかったのです。これは『数学』を褒めすぎでしょうか。いやいやそうでもないのです。考えてみてください。日本語を母語として、世界標準から最先端レベルの数学雑誌を母語で読める国は世界にいかほどあるでしょう。

筆者はいくつか本を書いています。縁のあるチェコやスロバキアの友人に、なんで本を書くのか聞かれたことがあります。適当に答えた後、なんで本を書かないのか逆に聞きました。そしたらその理由は明白で、マーケットが小さいことと、英語で書かれた本が沢山あるから十分、という答えでした。確かにチェコの人口1050万人は東京と神奈川の人口の間くらいで、スロバキアの人口540万人は兵庫県くらいです。ヨーロッパで日本の首都圏4400万人よりも多い人口の国は50ヶ国中6ヶ国程度です。また、英語で書かれた本があるからそれでよい、で済ませられる人は、なんだかんだといっても英語を読んで頭の中に意味と概念がずっと入ってくるアルファベット文化圏の人です。現在のチェコ語（スラヴ語派）と英語（ゲルマン語派）は素人目にもかなり違いますが、広い意味では同じインド＝ヨーロッパ語族であり、似たような文字を使っている時点で、日本語という極東の孤立言語に比べたらその違いは微々たるものと感じます。

慣れれば英語の数学記事を読めるようになります。しかし、読めることと概念の把握は異なります。だから、母語で数学や科学などの専門用語や概念がすべて揃っていて、母語で数学を語り、議論できる環境に身をおけるありがさは身に沁みます。そうでない環境の国もあります。例えば東南アジアのある国では、数学の教科書を概ね母語で書いているけれども、肝心の定理などの主張は英語で表現するようです。母語で書けないこともないけれども、専門用語が整っていないくて、とてもまどろっこしい書き方になるからとその国の人に聞きました。少し話が逸れますが、日本人は学校で沢山英語の勉強をしているはずなのに、いつまでたっても英語ができないといわれます。その本質的な理由は文法が大きく異なるという言語学的な問題ではなく、学術もエンタメもあらゆるカルチャーが日本語だけで問題無く楽しめるから、皮肉にもまったく切迫感が湧いてこないからなのだと素朴に考えられます。

今時の数学系の学生には、高木貞治『解析概論』は必読の書ではないかもしれませんが、明治期の人の書いた文章は一読に値します。学部生や大学院生でまだ見たことない人は、図書館に行って、第5章から「玲瓏なる境地」というフレーズを探してみてください。たまたま三島由紀夫『豊饒の海』に玲瓏という語を散見して、羽生善治棋士の色紙『玲瓏』があることを先日友人に教わりましたが、筆者にはこれくらいの知見が関の山です。ある著名な同時通訳者によれば、後から学んだ英語（外国語）は日本語（母語）よりも決して上手くはならないそうです。しかしこの説は、日本語が上達すれば英語が上達する余地が増えると前向きに捉えることもできます。その意味でちょっと昔の人の数学書は、数学も日本語も勉強になりますので、珠玉の言葉の宝探しと英語上達の余地を増やすためと思って楽しんでみてはいかがでしょうか。

日本数学会は、1877年に設立された東京数学会社を起源とする1946年に設立された学会です。高木貞治の弟子の正田建次郎が初代理事長でした。雑誌『数学』は、日本数学会設立の翌年1947年4月創刊の邦文誌です。現在は年4回発行され、2023年度は第75巻3号まで出版されています。つまり、創刊以来現在まで約75年間、連綿と『数学』は続いていて、邦文誌としての価値は上述してきた通りで、内容の質の高さと継続性において、その存在そのものが玲瓏なる高みに達しているといっても過大評価ではないでしょう。このような希有な数学雑誌が存続できたのも日本数学会の会員の支えがあったればこそであり、すべての会員とその関係者に、そして前編集委員長として少しだけ関与できたことに、感謝いたします。